
放課後の秘密

cheek

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

放課後の秘密

【Nコード】

N4154M

【作者名】

cheek

【あらすじ】

小学校5年生の【黒澤^{くろさわ}斐愛】には、人に知られたくないことがあった。それを解決するために、協力を要請したのは学校で一番人気の【藤森たまき】だった。

ファンタジーです。苦手な方は注意して下さい。

「ちょっと斐愛^{ひめ}、いい加減話してくれてもいいんじゃないの？」

眉根を寄せたトモが詰め寄ってくる。

ん？

「ん？じゃないっつーの！ホラ、アレよ！」

ワザとトボけてみせているのに、逃げ道を塞ぐように詰められてしまった。

「笹岡。結局何があったのよ？」

聞かれて、思わず口を閉じた。経過はどうであれ、モンチ…島田さんの言葉は正しかったと、今なら解る。

たまちゃんの事は、絶対に言えない秘密、だから。

私の通う有坂小学校は、緩やかな坂の上にある。九月も半ばだというのに、容赦なく注ぐ太陽の陽射しとアスファルトの照り返しに泣きそうになりながら、黙々と歩いていたら。

「危な…あ！」

どん、と何かにぶつかった鈍い感覚があつて、すぐに「ごめん」と声を掛けられた。

目の前の青いパーカー。

すぐに『藤森たまき』だと気が付いた。

「ごめんっ急いでて…本当にごめん！」

答える間もないまま、ふわふわの茶色いショートヘアを揺らして走り去ってしまった。

「はあ…！今の、藤森たまきじゃない？」

「いいなあ…声掛けてもらつて」

滅多に声を掛けて来ない登校班のメンバーだけど、騒ぐのも無理はない。

藤森たまき。

男の子のような名前を持つ彼女は、私達の学年…五年生なら知らない者はいないだろうというほどの、超有名な人だ。何が、というわけでもないがとにかく目立つ。騒ぎの中心にはいつも青いパーカーがあつて、すぐに藤森たまきだとわかるのだ。

六年生でも有名な人はいるけど、その内容が『呪われる』というものだったから、五年生を羨ましがる人は多くて。一度も話したことはなかったけど、同じ五年生だというだけで誇らしかった。

他にも、五年生にしかわからない有名な人なら、たくさんいる。

冬枝亨率いる『ドリーズ』だとか、『氷の女王』だとか…だけど『藤森たまき』は別格だった。何せ他の学年にも知られている程の有名な人なのだ。

…だから少しだけ、この日の朝はトクベツだったんだと思う。

「おはよー斐愛！」

「トモ！おはよー！」

木田朝水^{とみ}は一年生以来の友達で、今年また一緒のクラスだと解つた時は本当に嬉しかった。

「アンタ今朝『藤森たまき』に声掛けられたんだって？」

トモの質問にビックリする。

「何で知って…じゃなくて、ぶつかったの」

声を掛けられるほど目立つ人間じゃないっていう事は、嫌というほど自覚している。

「へえ、ぶつかったんだ…わざと？」

「なんでよ！」

確かに『友達になりたいか？』と聞かれれば答えは『イエス』だと思う。というか彼女と友達になりたい人間なんていないんじゃないかなあ？でも私は…

突然、大きな笑い声が聞こえてきて、トモが悔しがる。

「また隣からだ。くそ〜いいなあ二組！」

二組には藤森たまきがいる。こんな風に、いつも楽しいことの中にには彼女がいるのだ。

「こらあ！またお前か藤森！学校で動物を飼うなとアレほど…」

先生だって本気で怒ってないコトくらい皆知ってる。でないとなんかに楽しそうな声を出すハズがない。

「あゝあ、アツシらも二組がよかったなあ、斐愛？」

それは…確かに。

「そしたらアンタもチョットはクラブのコト、考えずにすむのにね」
トモの質問に答えようとしたけれど、何かが喉に詰まったように、声が出せなかった。

有坂小学校では四年生になると強制的にクラブに入らされる。
姉の影響を受けているから、何をおいてもバレー部に入った、の
だけ。

「ね」

トモが真剣な顔をして切り出した。

「ホントにさ、シマさんに相談してみたら？」

ぐ、と詰まる。

シマさん、島田陽香^{はるか}は問題の六年生…『近付くだけで呪われる』と噂の、島田健志の妹で、私と同じ五年生だ。島田陽香とトモはクラブが一緒によく話すらしい。だけど私は一言も話したことがなくて、そんな人間が相談するといつても…。

「相談したらさ、ひよっとしたら…さ。呪ってくれるかもよ？」
笹岡。

「…今日の放課後、相談してみようかな…」
じつとりと掻いた汗が気持ち悪かった。

呪い。

テレビ番組や夏の怪談でしか聞いたことがないから、正直実感なんてないのだけど。悪いことなんだっていう事くらいは知ってる。でももう、限界だった。

『噂』はそこかしこに広がり始めている。

それを何とか食い止めたい。せめて、彼女の耳に届くまでに何とかしたい。

信じられないものを信じなくなるほどには…悪いことをしてでも逃げ出したいと願うほどには焦っていた。

…本当にその時が来たら、ビビりまくってしまふのかもしれないけど。

1（後書き）

児童書のつもりで書き始めました・・・。

放課後に予定がある日の授業は、いつもより長く感じる。…月曜日だから尚更なのかもしれないけれど。

トモから「シマさん、今日の放課後いいってさ」と聞いてからはより一層長く感じるようになってしまった。ああ、こんな事なら。

「月曜はさあ、四時間で終わればいいと思わない？」

「ホント、マジでそう思う〜！」

トモが大げさに肩をすくめるから、思わず噴出^{ふきだ}してしまう。ふわり、いい匂いがした。

「あ、ドーリイ」

ゆるふわカールの茶髪、少し垂れた眉尻、優しそうな目元、雰囲気。人形^{ドール}みたいな外見の彼女に、彼女の名前（冬枝^{とある}亨）をもじって付けられたあだ名が『ドーリイ』だった。

一見して美少女の彼女は近付いてもいい香りがしてドキドキしてしまう。

「はあ〜ドーリイズ！いつ見ても迫力パねえ〜」

「ね〜」

冬枝亨が引き連れている美少女軍団の名称が『ドーリイズ』だった。

彼女たちを見るたびに思うことがある。

美少女は美少女としかツルマナイ。というか、お洒落な人はお洒落な人としか話が合わないんだと思う。ドーリイズは皆美人だけでも化粧をしてる人までいて同じ小五とは思えない。だけど、ノーメイクにも係わらず一番綺麗なドーリイは流石というか何と言うか。美少女はどこまでいっても美少女なんだなあ…。

「アンタも美少女なんだけどねえ」

「…何言ってるの」

トモの予想外すぎる言葉に、顔をくしゃつと潰してしまう。臭い匂いを嗅いだ時のしかめっ面だ。

「だってさあ、そうじゃなかったら今頃あんな問題も起きてない…ってアンタ！何て顔してんの！？」

あはははは！

大声で笑われてしまった。

「そうそう、アンタなら言わないとは思っただけどさ」

まだ半笑いのままトモが続ける。

「シマさんね、おサルさんみたいだって言われるの、大嫌いなんだって。特に『モンチッチ』に似てるってね、言われたくないらしいんよ」

目が点になる。

「モンチッチって…あの、黒くて小さい目の？」

「そうそう、お土産屋さんに売ってある」

トモに言われて想像する…確か母のケータイにぶら下がっていた沖縄土産のストラップが…

「言われてスツゴク嫌な思いしたんだって。つかソンナコト言ったの誰だよってカンジだよね」

ね、と相槌を打ちながら。

モンチッチって、可愛かったと思うけどなあ…なんて事をノンキに考えていた。

ばっくん。ばっくん。

心臓が耳の後ろにぴったり張り付いたようにウルサイ。ついにこの時間が来てしまった…『帰りの時間』が終わったら、いよいよ放課後だ。

緊張で手から血の気が引いていくのが解る。異様に冷たくて、上手く力が入らない。

…どうやって切り出そう。

さっきからそればかり考えてしまって、「島田さんのお兄さん、人を呪えるんですか？」とか「実は呪って欲しい人がいて」とか、そんな失礼な言葉しか思い浮かばない。

だけど何回考え直しても、結局して欲しいことはたったひとつで、その為なら今後嫌われるだ何だと考えている場合じゃないのかもしれない。

「起——立！礼ッ」

「さよーなら！」

すう。はあ。

深呼吸を繰り返す。トモが、近づいてきた。

「…斐愛」

覚悟なら、もうできた。

「黒澤さん？アタシに話があるってトモから聞いたんだけど…」
誰も居ない空き教室にコッソリ忍び込んで、秘密の相談を持ちかける。

対する彼女は、クリンクリンの真っ黒なクセ毛をベリーショートにしている、一見すると確かにモンチツチそっくりでとても可愛い。違うといえばソバカスがないくらいで、アレがあれば完璧なのに、思ってしまった。目も小さくてクリクリで本当に可愛い。

ああ、これからこの人に嫌われるかもしれないなんて…

「あの」

ごくろり、生唾を飲み込む。

「…島田さんのお兄さん、人を呪えるって聞いたんだけど…」

「ハア！？」

怖ろしい形相で睨まれてしまった。

私、とんでもない間違いを犯してしまった、か…な？

「何、ハナシってそんな事なワケ？」

噛み付く勢いで言われて顔がこわばる。ああ、きつと間違えた。

「バツ…バレー部、の、こと…で」

ああ、何てバカな事を考えてしまったのだろう。呪いだとか、あ
るはずないのに。いくら自分がピンチだったからって…！

「バレー部…」

島田さんが、はっとした声を出した。

何だろうと思って首を傾げていると、「そうか、それで」と小さく呟いた。

…噂は予想以上に大きく広がっているのかもしれない。

「アタシね。できたらもう呪いだとかそうゆうの、関わりたくない
の」

ハッキリした口調で言われて、反射的に頷く。何？何を言いたいのか？

「だから、黒澤さんに聞きたい事はヒトツだけ……」
ぴつ、と短くて太い人差し指を出して。

「呪いたいくらい許せないヤツがいるの？」

許せない……ううん、そうじゃなくて、この現状を何とかしたかっただけで……。

考え始めた瞬間、笹岡の顔が脳裏を横切る。

……本当に？

本当にそれだけだろうか。もしかしたら、本当は。

「……どうしても、許せない」

かもしれない。

笹岡を……ひよっとしたら、バレー部のメンバー全員を、私は。

ハア、島田さんはヒトツ溜息をついて、静かに切り出した。

「……後悔するかもしれないよ。それでも呪いたい？」

じつと目を見る。どう動けば自分にとって有利になるかを考えながら出方を伺っていると、島田さんが聞いてきた。

「同じだけの報いを受ける覚悟は、ある？」

報い？

報いを受けるといふのなら、アイツらの方ではないの？

迷いなく頷いた。

……笹岡も報いを受けるといふのなら、私だってこれからする行動の報いくらい受けてみせる。

「じゃあ……しようがないね」

苦笑、といった表情を浮かべて、島田さんが「協力してあげる」と言った。

「まあ事情が事情だしね、バレー部の噂ならアタシも聞いたことあるのよ。だけどさっきも言った通り、アタシは呪いとかそういうの

に一切関わる気がないワケ。ていうか本当はアイツらにも会いたくないんだけど…今回だけ、トクベツね」

「アイツら？」

聞いた瞬間、勘違いでも何でもなく島田さんの顔が固まった。

「…本気で人が呪える連中よ」

冷やかすには余りにも緊迫した雰囲気。ごくろ、思わず喉を鳴らした。

「あはは！大丈夫よ、そんな青ざめた顔しなくても…怖くないから」
「でも、島田さんもう会いたくないって…」

「じゃあどんな理由が？そう思ってた何気なく聞いたら。」

「そうね、さっき言ってた覚悟が足りなかったのかも」

眉毛を下げて、困ったように微笑んだ。

「さて、それじゃあ行きますか」

この時間ならまだいると思うの。そういう島田さんの後について、教室を出る。といっても時計の針はすでに四時前を指していて、通常の生徒なら残っていない。なのに迷いなく歩いていくから、何も言えずにただついていく。入っていったのはいつも見慣れた教室、の、隣。…え、二組？

「あ、やっぱりまだいた。おい、たまき」

え、

ええ！？

「あれ、モンチ？」

「モンチって呼ぶなっつーの！」

「あはは、喜んでるクセに」

茶色くて短い髪をふわっとさせて。

首を傾げた『藤森たまき』が、確かに目の前にいた。

「え、のろえるって、え、え？」

おろおろと島田さんの上着の裾をひっぱりながら聞くと、藤森たまきが目を輝かせながら腕まくりした。

「あ、呪っていいの？じゃあ早速」

「ちよっ！く、黒澤さん呪っちゃダメエ！」

はあはあはあ。

肩で呼吸を繰り返しながらモンチ…間違えた、島田さんが涙目で藤森さんを睨んでいる。

「たまき、黒澤さんに協力してあげて欲しいの」

「えー面倒くさーい」

藤森たまきの返答にドキリとする。ひよっとしたら必要なものかもしれない。代償とか、そういうものが。

ガシッ。

島田さんが怖ろしい形相で藤森さんの肩を掴んで「カリ…」といった。

「返してもらいましょうか。あるはずよねえ？とんでもなくデカいのがヒトツ」

笑ってるハズの島田さんの笑顔は怖ろしく、隣で立っているだけなのにあわあわしてしまふ。

「え、あの、島田さ…」

「…へえ」

ひんやり。

効きすぎるクーラーを入れた瞬間のような冷気を感じてどきりとする。え？

「…脅す気なんだ？」

藤森さんの目が全然笑ってなくてビクビクしてしまう。何だろう、お母さんが怒ってもこんなにドキドキしないんじゃないやあ…

恐る恐る隣を見たら、島田さんも同じように固まっていた。

「でもいいよ、モンチにはカリがあるらしいし」

につこり笑っているハズなのに圧力を感じて堪らなく怖い。

「で、あなた誰？」

「誰かも知らずに呪おうとしたの！？」

藤森さんの質問に、間髪入れず島田さんが突っ込んだ。藤森さんが笑う。

「まさか！冗談に決まってるじゃない、嫌だなあモンチは」

「…何となく…」

何となくだけど、島田さんが会いたがらない気持ちかわかってしまった。

なんていうか、会話の流れが全て藤森さんペースになっている。

「…あの、三組の黒澤斐愛ひめです」

「黒澤姫？黒姫か、いいね！」

につこにつこしながら話を聞かれて戸惑う。ええと、どうしよう。

「あの…」

「ストップう！」

え？

「何さモンチ、協力しろって言ったりストップかけたり…」

「あのね、たまき。私は協力してって頼んだけど、一切関わりたくないの」

「えゝ何ソレ、横暴」

「ぶーぶーと口を尖らせているたまき…じゃない、藤森さんはちょっと可愛い。なんていうか、自分が話せる日が来るなんてちょっとビックリだ。明日トモに自慢したい。」

「何とでも言って。それから、放課後以外は黒澤さんに関わらないこと！」

「えッ!？」

「ビックリしすぎて思わず声に出してしまった。二人の視線がささって痛い。」

「…あのね」

「島田さんがポン、と私の肩に手を置いて。」

「全部終わったら、絶対感謝すると思うから。とりあえず日常は今まで通り、普通に過ごして。絶対にたまきと会話しちゃダメ!他の人に、たまきと知り合いだってバレルのもダメ!それから、たまきと目が合っても絶対無視!いいわね?」

「有無を言わせぬ凄みに、思わず頷いてしまった。」

「ああ、私のバカ…!折角あの『藤森たまき』と知り合いになれたっていうのに…!」

「じゃあアタシは帰るから。後は二人で話して」

「サラっと言って島田さんが席を立ててしまった。」

「どうしよう、藤森さんと二人なんて緊張する…!」

「モンチ」

「モンチって呼ぶなっつつてるでしょ!」

「バン!」

思い切り大きな音でドアを閉めて、本当に帰ってしまった。うわあ…

「ふふふ、おもしろいよねえ。本当に呼ばれたくないなら返事なきやいいのに」

ああ…誰も適わない。

『だから会いたくなかったのよ!』

島田さんの叫びが聞こえた、気がした。

4 (後書き)

漸くたまきの登場です…。

「あら、いらつしゃい」

「は、はじめまして…」

ああ、何て美人なお母様…！
じゃない。

私は今、『藤森たまき』のお宅にお邪魔している。
なぜこんな事に…なんて冷や汗を掻くけど、ここまでついてきて
今更どうしようもない。

アノ後…島田さんが帰ってしまった後。

話をしようとしたら、「ミサミサに聞いてもらった方が早いかも
作戦とか的確なアドバイスはミサミサに限るし、いいよね？」と言
われて、ミサミサって誰？と質問するより先に「でもこの時間はも
う帰っちゃってるだろうし、一緒に来てチヨ」と一方的に告げられ、
そのまま拉致…もとい、連れて来られてしまった。

初対面の人間を家に呼べてしまう藤森さんのスゴさだとか、ソレ
を笑顔で受け入れてしまえるお母様の大らかさだとか、それなのに
片付いてる綺麗なお家だとか、思うところはイロイロあるけど、そ
れ以上に。

「今呼んだし、ラクにしてていいよ」

「…うん」

こくりと頷きつつ、できるわけがないと思った。

藤森さんの後ろを歩きながら見たモノ…墓場。

およそ手入れなどされている様子もなく、荒れ果てて酷かったそ
れらが、二階の藤森さんの部屋からも見えてしまうのだ。一つや二
つではない。十や二十でもない。大量のお墓が、部屋の窓から…。

その状況で。

どうやってラクにできると思うの…！

「あ、ミサミサ来たみたい。黒姫、何飲む？」

「あの、お、お構いなく」

「あはは、遠慮しなくていいよ、オレンジ・紅茶・緑茶・コーヒー、何がいい？」

「本当にお構いなくッ…！」

「遠慮するタイプには適当に選んだらいい。ほら、緑茶」

「うわあ、背え高い…！」

ガチャリ、開いたドアの先。黒髪めがねの女の子が立っていた。

「え…ッコーヒーがよかったのに」

「飲めないワケじゃないだろ、我慢しろ。ん」

現れた少女は、藤森さんの文句に動じる気配もない。

「あ、ありがとうございます」

渡された緑茶を大慌てで受け取る。肩まで届かない梳かした髪、上がり眉に切れ長の目。知的な印象のソレ。

「はじめまして、鈴原美咲^{みさき}だ。どうせたまきに言われて無理やり連れて来られたんだろう？」

鈴原美咲…初めて聞く名前だった。

「はっはじめまして、黒崎斐愛^{ひめ}です。」

「黒姫が話聞いて欲しいって言うてるから連れて来たんだ」

アレ？そうだったっけ…そうだったかな。

「本当か？」

「ミサミサさんの質問に、素直に頷く。」

「なら、話を聞く代わりに条件がある」

え？

「ミサミサは人が嫌いであ」

「たまちゃんがフォローを入れてくるけど、ええ？」

「学校でも目立たないように過ごしている。だから私と会っても知らないフリをしてくれ」

学校。ということは同じ有坂小なんだろうか。

背も高いし、六年生、かもしれない。

「…さっき、島田さんにも言われました。学校では今まで通りに過

「ごして、藤森さんとは絶対関わるな、って…」

「島田さん？」

「ミサミサさんが首を傾げる。」

「モンチだよ」

「ああ」

藤森さんからの説明に納得してるけど、本名がわからないなんて…そんな。

「賢明な判断だな。で、用件は何だ？」

「さあ？話はミサミサと一緒に聞こうと思ってたから」

「そうか。じゃあ決めよう。黒姫と私が会話するのは放課後、この家でのみ、だ。それ以外はありえない。いいな？」

島田さんとは違った威圧感。だけど、早く今の現状を何とかしたいから黙ってコックリ頷いた。

秘密つて、結構ドキドキする。

座卓を囲みながら藤森さんが言った。

「さあ、聞かせてよ。どんな話？」

「私、バレエ部に入ってるんですけど」

うんうん頷く二人を見て、この様子なら噂も知らないんだと理解した。

深く、呼吸する。

「…今年から、顧問が笹岡に代わって」

「笹岡？」

藤森さんとミサミサさんが同時に首を傾げるから、慌ててフオロ
ーする。

「あ、四年の担任だから普段は見ないんですけど、全校集会で毎
生徒指導とか話してる先生です…」

「皆目検討が付かないな」

この二人は本当に全校集会に参加しているのだろうか…。集会と
いえば、必ずといっていいほど発言しているヤツなのに。

「…進路も担当してるんですけど、ミサミサさん見たことありませ
ん？」

「ないな」

「…藤森さんも、来年お世話になるかもしれませんよ？」

「それはその時考える」

「考えるんだ…。普通は『覚える』んじゃないか…」

「それで？そのナントカってヤツがどうしたんだ？」

ミサミサさんの質問に、ああ話がずれたと思い出す。

「ええと、髪が長いと注意されて」

五年生に上がってから、初めて参加するクラブの日。

顔合わせだけだから、その日だけたまたま髪を下ろして参加し
たのだ。なのに「髪が長い。スポーツをする気があるのか」と注意
されてしまった。情けないやら悔しいやらで、第一印象から最悪だ
った。

翌日はちゃんと括って行ったのだ。いつも通り、邪魔にならない
ように二つに分けて。なのに笹岡は「やる気がない」と言って、私
にだけ別メニューを言い渡した。

…他にも髪の長いコはいっぱいたのに。

括っていないコさえいる中で、どうして…自分だけ？

最初はそんな小さな疑問だった。けど。

笹岡の地味な嫌がらせは、そのレベルを徐々に上げ始めて。体操服を隠されるのも当たり前になってしまった。

その内、準備運動でペアを組んでいた子がいきなり口を利いてくれなくなって。変だな、と思っていたら誰もペアを組んでくれなくなった。

ぼつんと一人で立っていたら、笹岡が言ったのだ。

「仕方ないなあ黒澤は。先生と組むか？」

その時の目が、表情が。ただひたすら気持ち悪くて。

柔軟の間中触られた背中や足首が、酷く汚れた気がした。

…その感覚は、お風呂に入っても消えなくて。

余りの気持ち悪さに我慢の限界だと立ち上がって、次の日、もう一度自分とペアを組んでもらえるよう、先輩の教室までお願いしに行ったのだ。そしたら。

「…ごめんねえ、斐愛ちゃんには悪いと思うけどさ、笹岡のヤツ気持ち悪いんだもん」

「そうそう、斐愛ちゃんと組むとさあ、絶対嫌がらせしてくんの」

「だから正直斐愛ちゃんとはもう組みたくないっていつかあ」

「関わりたくないっていつか…」

以心伝心とはこういうことをいうのだろうか。先輩の思いは見えない空気のまま、後輩・同級生、果ては下級生へと伝染して、誰もペアを組んでくれなくなった。

どころか、声を掛けても返してくれず、近付いてさえもらえず。その感染はクラブを超えて噂となり、学年に浸透し始めた。トモがいなかったら、クラスでもとくに孤立していたかもしれない。発信源のクラブでは、とうとうボールをぶつけられるまでになった。

一人で壁打ちしながらパス練習をしていたら、いきなり背中にボールを当てられて。

「あれえ？この壁、以外に近いよあ？」なんて。

「…いじめに近い状態に追い込まれるまで、そう時間は掛かりませんでした」

「いじめに近い、っていうかソレ…」

ぼつり、藤森さんが零した言葉にミサミサさんが続ける。

「いじめ、だな」

金槌で思い切り殴られた気がした。

解っていたつもり、だったけど。

…自分が本当にいじめを受けるだなんて、想像もしていなかったから。

「んで…今までずっと、黒姫は笹岡と組んでたワケ？」

藤森さんの質問に、膝の上の手をぎゅっと握り締める。気持ち悪い触られ方、無意識に嫌悪してしまう眼差し。

「…はい」

「どうして？クラブ変えればいいのに」

「無理だ。たまきは興味ないから知らないだろうが、ウチは一年ごとじゃないとクラブを変えられないことになっている」

「ウザッ…！」

「でも、そうだな。たまきじゃないが、サボればいいじゃないか」

「…はい。だから今日」

サボったんですよ…。

笑ったつもりの返事は、涙の所為で酷く震えていて。

泣くつもりなんてなかったのに、止まらない。

「…ん。わかった。話はようつくわかった」

ぼん、ミサミサさんに肩を叩かれる。

「黒姫、よく頑張ったね」

藤森さんが、ぎゅう、と抱きしめてくれた。

止めたいのに、涙が勝手に溢れてくる。迷惑を、掛けたいわけではないのに。

「…迷惑なワケないだろう。で、たまき、どうする？」

え、え？

「呪うなんて生ヌルイね。よし、叩き潰すか」

タタキツブ…え？

藤森さん、今なんて？

「ミサミサ、何か手はある？」

「そうだな…先に『ササオカ』とやらの顔を知っておいた方がいいな。覗くのは私、たまきは黒姫警護つてところか。そういえば尾行が得意なヤツが一人いたような気がするが？敵に取り入ってもらってもよし、だな」

呆然とする私を置いて、二人の会話がポンプン飛び交う。え、何がどうなっているの？

「さすが参謀、よく回る頭だね！呼んで正解だったよ」

「おだてるな。とりあえず明日は様子見だ。いいな？」

ミサミサさんが藤森さんに確認している。

「うん！」

藤森さんは元気に返事したけれど。

「…本当にわかってるんだろうな…」

呟いたミサミサさんの言葉は、溜息と一緒に床に落ちた。

坂道を歩く足が、いつもより軽い。

何も解決していないのに、話ができたというだけでこんなにも世界が違う。

昨日みたいに、藤森さんとぶつかる事件でもなければ絶対に声を掛けてこない登校班からの無視だって、全然苦にならない。

「おはよ〜斐愛！」

「トモ、おはよ」

「おあよ！」

え？

「黒姫、今日は髪括ってんの？」

「ふっふじもりさん？」

『元々三組のクラスメートでした』といわんばかりのナチュラルさで、藤森たまきが立っていた。

「たまき。りぴーとあふたみー」

え、え、

「え、た、た、…たま」

いきなり呼び捨てってどうよ？

「…ちゃん？」

「おしいっ！けどカワイイからまあイヤ」

そう言っつて、ニツとオトコマエに笑っている。って、いやいやいやいや、そうじゃなくて。

「学校じゃ関わらないって約束っ…」

「した覚えはないけど？」

ええええええ！？そ、そうだっけ？でもミサミサさんもモンチ…じゃなくて島田さんも、確かにあの時…あの時…。

「ハイ残念。約束したのは黒姫だけでした」。ま、エサも釣れたし

帰るわ」

ええええっ…

「…エサ？」

普通に現れた藤森さんはそのまま普通に帰って行ってしまった。
何だっただらう？

「ちょ、斐愛！なんで『藤森たまき』がアンタに声掛けんのよ？」

「や、なんでっって聞かれても…なんで？」

「アッシが聞いてんのっ！」

トモが大声を出して怒っている。

「いいなあいいなあ…！ひよっとして『黒姫』って、アンタのこと？」

「みたい」

気付いたらいつの間にかそう呼ばれていたのだけど。

「ふうん…黒姫、ねえ…」

…フと我に返ったら、今更ながら大げさなあだ名が恥ずかしい。

「アンタにぴったりだね」

え？

「だって、真っ黒な艶タストレートでしょ？姫カットにしてあるし…
うわ、背中まであつたっけ？随分伸びたねえ…時代劇のお姫様みたい」

ふふ、トモが笑う。

「ね、アッシも黒姫って呼んでいい？」

「は、恥ずかしいからヤだよ！」

「なんで？いいじゃん、似合ってただし」

ニコニコ笑うトモには勝てる気がしない。…私も、確かに恥ずかしいけど本気でイヤじゃないから笑顔で応戦する。人が良いトモは、私が本気で嫌がることは絶対にしないって知ってるから。

「…藤森たまきさあ、ひよっとしたら、昨日アンタにぶつかったコト、気にして来たのかもね」

ホント、人が良すぎて騙されるんじゃないの…？

心配していると、トモが声を潜めて聞いてきた。

「そっぴや昨日…どうだったの？」

島田さんの事だ。

聞かれてどきつとする。あくまで秘密なのだ…昨日の放課後のことは。

言葉に詰まっていたらトモが言った。

「…やっぱり、呪いとかって嘘？」

大慌てでウンウン頷く。

「そうなの！モン…島田さんも凄く怒ってたよ、そんなシツレイな事言うのは誰だーって」

「げ、マジで？」

「うん。噂で聞いたんだけど、って言ったら、やめてよって言われたよ」

コレでトモが島田さんに近付くこともないだろう。

その日、たまちゃんは休み時間の度に遊びに来ては二・三言話して教室に帰っていった。そのコトがひそひそ周りから聞こえてきて居た堪れない。トモはといえば、「藤森たまきと仲がイイってなったらさあ、皆もう無視とかできないよね」とか言って笑ってるんだけど。

… そんなにカンタンにいくかなあ？

「… 黒澤さん、あの、外、呼んでるんだけど…」

昼休み。話しかけてくるハズのないクラスメートに声を掛けられて、不穏な匂いを嗅ぎ取った。心配するトモに「大丈夫」と笑って出入り口に行くと、案の定というか何と言うか。

バレー部の先輩達が立っていた。

「… うちの言いたいこと、解るよねえ？」

女子トイレに連れ込まれて、逃げられないように囲まれる。… そんなコトされなくても逃げる気力なんかないというのに。

罪人を見るような冷たい視線。

汚いものを触るような仕草。

その一つ一つにいちいち傷つく自分がうつとうしいのに止められない。

「アンタさあ、何勝手に休んでんの？」

「その所為でアタシらすつごく迷惑したんですけど。どうしてくれるの、ねえ？」

言いながら、人差し指で肩を突かれる… 何度も。

「ほんつとウザイの。暗いしさあ… 何とかなんないわけ？」

「アタシらもさあ、別にアンタの事いじめてるわけじゃないのよ？」
嘘だ。

心の中が、砂を噛んだようにざらりとした。

「ただ、アンタが先生に取り入ろうと必死だからさあ…そういうの、印象悪くなるって教えてあげてんの。解る？」

笹岡に、取り入ろうと？

「…誰が、いつ、そんなこと…！」

笹岡の気持ち悪い視線が蘇る。見ていたクセに、誰も助けてくれなかったクセに！あの手に触られるのを、どんな思いで我慢してた…！

「ハア？ナニ口答えしてんの。アンタにそんな権利あると思ってんの？」

「っーかさあ、休むなんて半端するくらいなら」

死んでくれればよかったのに。

視界が、真っ赤に染まった気がした。

「…そこで何してる」

カタン、音がして誰かが息を飲む音が聞こえた。

「まさかと思うが、イジメか？」

「うるさいなあ。誰もイジメてないっつの。いきなり来て何なわけ？」

誰かが近付いてくる足音が聞こえる。…嫌だ、やめてよ恥ずかしい。

「いや、知らないバカには教えてやろうと思ってな」

長身の影。肩までの髪、上からの物言い…まさか。

「イジメ、かつこ悪い」

腕組をしたミサミサさんが、聞き覚えのあるキャッチフレーズを言いながら完全にバカにした態度で先輩たちを見下していた。

「なっ…」

「違っつつてんのに聞こえてないワケ？」

「そこまでアタシらバカにして、証拠は？ ないなら慰謝料もらっわよ！」

こいつらっ…！

腹が立って仕方がない。言い返したい言葉がたくさんあるのに出てこなくて。悔しくて情けなくて、歯がゆくて仕方がない。

「…証拠なら」

悠然とミサミサさんが口を開いた。

「お前たちが一番知ってるんじゃないのか？」

焦りのない声。これだけ言われたって一步も引かない姿勢…なんて格好いい。

「ナニ、デンパなワケ？」

「あはは、キモッ！ デンパがデンパ呼んでんよ」

ははっ、笑われて頬が熱くなる。最低だ。こいつら、最低だっ…！
「…へえ、一応取り乱す程度の自覚はあるわけだ…」

冷たい声が響いて怖い。ミサミサ、さん？

「そうか、ボールをぶつけたのはお前だな？」

先輩の一人を指差した。

「それを見て嘲笑したのはお前。体操服を隠したのも本当はお前だろう？随分と陰険な真似するじゃないか。チェーンメールや荒らしはソッチの二人か。いや、もっというるな」

先輩たちがサツと顔色を変えてミサミサさんを凝視している。

「…慰謝料といったな。法律的にどういう立証が必要か、教えてやるうか？」

ヒトリ対大勢なのに、一步も引かない。どころか圧倒していて、その差は余りに大きくて。

「私に弁論を挑むなら、勉強し直してから来い」

細いメガネがキラリと光る。

「半端な覚悟では私には勝てない」

冷たい笑顔は雄々しく、凜々しかった。

ポンと肩を叩かれて、目で『行こう』と合図を受ける。

ミサミサさんは一度も振り返る事無く颯爽と前を歩いていく…その背中が誇らしい。

適度な距離を空けたまま三組まで送ってくれて、そっと離れて踵を返した。

…六年の教室に続く廊下は、この先にあるのに。

「ちよつと斐愛、大丈夫？ドコ行つてたのよ〜！」

「トモ！」

クラスに入る直前にトモが心配した顔して飛び出してきたのを抱きとめる。

「あっ見てみて、『氷の女王』がいるよ！めっずらし〜！」

「え、どこどこ!？」

『氷の女王』の噂なら聞いたことがある。

『藤森たまき』や『ドーリイズ』ほどじゃないけど、五年生の間では結構有名だから。

常に一人でいて本を読み、移動の時間でもない限り教室から出てくることがない。態度はいつも『女王様』で、笑い話にも反応しない徹底したクールぶり。笑った顔を誰も見たことがないという。

その『氷の女王』がいるというのだ。ミーハーじゃないけど食いつかない方がおかしい。

トモが指差した先には、長身の人影。

…まさか…ミサミサ、さん？

六年生だと思い込んでいたミサミサさんは、本当は同じ五年生、で。

一度だけ振り返った彼女は、目が合った瞬間。

僅かに微笑んでくれた、気がした。

何だかとてもいいものを見たような気がする。

ぽおっとしたまま、いつの間にか『帰りの時間』も終わって、後は帰るだけだった。

だけど昼休みの事があったから、油断はできない。

クラブに行くトモと別れて、注意深く下駄箱に向かっていたら。

「黒澤」

背後から、大きな影。

一瞬で背筋が凍る。

「イカンなあ、昨日勝手に休んだそうじゃないか」

逃げなくちゃと思うのに、足が凍ったように動けない。体がプラスチックになったみたいに硬直してる。

「ん？」

笹岡が吐き出す息、一つ一つの中にはい菌が入ってるみたいで気持ち悪い。

「ああ、黒澤。お前がズル休みするような子だと知ったら、お母さんはどう思っかなあ？」

目の前が真っ暗になった。

ズル休みについて聞かれたら、クラブのことを話さなければならなくなる。そうなったら娘がいじめられるようなコだと、母が知ってしまったら。

きつと酷くガツカリする。

それだけではできない。知られるワケにはいかない。

「そういえば…この教員に身内がいるそうだなあ？」

この男、どこまで。

「…今日来たら、罰は軽くしといてやるぞ」
愕然とした。

行かなかったら告げ口…行ったらイジメが待ってる。どんなに輕くても、今まで以上にエスカレートしているイジメが…逃げ場所なんて、どこにもない。

「はっ、罰を受けるのはデメエだ。カスが」

目の前、青いロゴ入りのパーカーが見えた。

「なっ、教師に向かって…！」

「黒姫、まだ熱あるよ…！昨日もそれで休んだのに、罰だつて！その上今日は無理やりクラブに出ろつて言われたの？マジで鬼だな！」

「お、おい、何もそんな大声で…！」

たまちゃんだ。たまちゃんが来てくれた。

皆がチラチラこつちを見てるのがわかる。そうだ、たまちゃんはいつだって騒ぎの中心にいた。笹岡がオタオタし始めておもしろい。「ほら、一緒に帰ろう。フラフラしてて危ないから。つーワケでセンセエ、帰っていいですよね？」

「お、おまえ…！生徒のクセに…」

「ね？」

たまちゃんが笹岡と睨みあつてる。というか、睨まれた笹岡がひいてる。スゴイ。

「笹岡先生」

別の位置から声がした。

「先生、進路の事でちよつと相談が…体育館までご一緒してもよろしくて？」

ふわふわ髪を揺らして歩いてくる。ドーリイだ。優しい顔をして甘い匂いをさせている。

私の横を通り過ぎる一瞬、「消えればいいのに」と声がした。はつとして顔を上げると、ドーリイ…冬枝亨は、ネコのような顔をして笑った。

その笑顔に、ぞつとした。

このヒトは一体、何を知って…。

チラチラ見てくる生徒に混じって、長身のメガネが見える。
…ミサミサさん？

「ね、途中でアメ買って行こうよ！」

たまちゃんの提案に、慌てて反応する。

「か、買い食いはダメだって…」

「たまにはいいでしょ」

校則を軽く飛び越えてにつこりと笑う。たまちゃんの姿を見ただけで、全部解決してしまいそうな気がするから不思議だ。

「て、そんなに大きな買うの？」

「うん。大きくなかったら目立たないしコレがいい」

顔くらいの大きさがある棒つきペロペロキャンディーを二十本くらい力ゴに入れて、上機嫌で言われてしまった。ていうか目立たないって…。

何を考えてるのか、全然わからない。

「遅かったな」

たまちゃんの部屋に入ると、先にミサミサさんが座って待っていた。今日は紅茶を入れてくれてある。…アレ、カップがヒトツ多い？

「トールは？」

トールって誰。

疑問に思う間もなく、『もう一人』は現れた。

「ああもう最悪だわ！髪に腐臭がついたみたい…気持ち悪いったら！」

勢いよくドアを開けて、ドーリイが入ってきた。え？

ドーリイズのリーダー『冬枝亨』が、どうして？

「あら…^{ひめ}斐愛ちゃん、驚いた顔してどうしたの？」

や、え、だって…ひ、『斐愛ちゃん』？

「順番に話さねば混乱もするだろう。黒姫、冬枝は味方だ」

「えっドーリイが？」

「ドーリイ？」

たまちゃんが鸚鵡返しに聞いてくる。

「えっ、これはその、ふ、冬枝さんのあだ名というか…」

「あら、私ドーリイって呼ばれているの？」

知らないの！？

あんなに皆から呼ばれているのに知らないなんて…本当にビックリだ。

「…冬枝さん、有名だから」

「ドーリイでいいわよ、かわいいもの」

ふふ。笑いながら答えてくれる…『返し』が大人だ。

こんな美人でステキな人が…味方？

「昨日ミサミサが『尾行が得意なのが』って言ってたっシヨ？アレ、

トールのことなんだよ」

につこり笑いながらたまちゃんが教えてくれた。

…まさか、この三人が知り合いだなんて…！

共通点がどこにも見当たらず、不思議に思う。学校で口を利くトコロなんて一度も見たことがないのに、どうして？

「残念ながら私達三人は幼馴染なんだ」

ミサミサさんの説明にドーリイが食いつく。

「ちよつと、残念ながらつてどういう意味かしら…」

「ミサミサはトールが嫌いなんだよ」

たまちゃんがコツソリ教えてくれた。

「…じゃあどうして一緒にいるの？」

「ああ、それはね」

「たまき！余計なこと言わないでよ」

ドーリイにピシヤリと言われて凍りつく。

こ、怖い…！

「…まあいいわ。昨日教師イビリができるって聞いてね、参加したのよ」

につこり笑って言うけど、ドーリイって怖ッ…！

「バレエ部だと言っただけで目の色変えたクセに」

ぽそつと呟いたたまちゃんを、ドーリイが睨んだ。

「おかしいわね、余計なこと言わないでって言っただけなんだけど」

…同じ怒るのでも、美人は迫力があって本当に怖い。

ん？今、バレエ部って言った？じゃあ…内容知って…？

「…斐愛ちゃん、傷つけたならごめんなさいね、有名な話だから…
というか、知らないあなた達がおかしいのよ？」

イキナリ優しく言われてビックリする。口調も態度も、本当に私を心配しているものだったから。

「なぜだ？」

「人嫌いの美咲はともかく、たまき、あなた周囲に友達多いんだから、聞いた事があるハズなのよ」

「それがサツパリ」

「…もうちょっと他人に興味持つて生きなさいね、あなた達」

ふふっ。会話を聞いているだけでおもしろい。この三人の中で、ドリーが一番普通^{マトモ}みたいだ。

たまちゃんがニンマリと笑った。そうか、今日のドーリィのあの笑顔の意味は多分。たまちゃんと同じ、私のため。

「どうせヒトの知恵任せだろう？」

ミサミサさんの質問に、たまちゃんがペコリと頭を下げた。

「頼りにしてます、参謀殿」

「おだてるな。…たく…とりあえず情報交換だな。私から話そうか」

ミサミサさんが紙とペンを取り出した。

「冬枝が圀になつてゐる間に、笹岡を『覗いて』みた」

h?

「三十六歳、男、しし座のB型…毎朝八時には学校に来ているみた
いだぞ。フン、ご苦労なことだ…概略はこんなモノだが、中身は最
悪だ。それ以上の暴言が見つからないのが悔しいくらい最低だ。狂
つてる。そういえば、今朝たまきに目をつけただろう？」

え？

「あの、状況が飲み込めないのだけど……」

おそるおそる声を掛けると、たまちゃんが「ああ」と言つて、「ミサミサは人の心が『覗ける』んだよ」と教えてくれた。

へえ…そんなコトできる人が…

「アイツ、黒姫の事が好きなんだと」

「ええええええええええ！？」

お腹の底からビツクリした声が出た。

「み、ミサミサさん、人の心が覗けちゃうんですか？」

「そこかいッ」

三人から同時に突っ込まれてしまった。
…え？

「あのね、今回の事件が起きた動機について話してるのよ。驚く場

所はそこじゃないでしょ？」

ドリーイに言われてしまったけど…この場合って、私が悪いの？
…心を覗けるって、普通はソツチを驚くと思うんだけど…あれえ
…？

「…黒姫が好きな笹岡は、黒姫も自分が好きなんだと思い始めたんだ」

「ウザッ！」

「嫌だわ、気持ち悪い」

「ヤツは、黒姫がシャイだから中々自分に話し掛けて来ないのだろうと考え出した。で、他の部員や邪魔な人間を排除すればいいと納得し…最初は黒姫に話かけてくる部員をコソコソいじめていたらしい」

先輩が謝った最初の理由だ。練習が一人別メニューの私は、皆が
どういう状況にあったのか全然知らなかった。

「でも」

ドリーイがぼつりと言った。

「『だからイジメていい』という理由にはならないわねえ」

冷めた目をして口元だけで辛うじて笑っている。ミサミサさんは
メガネが光って表情がわからない。

「…理由なんか、どうだっていい」

たまちゃんが口を開いた。

「どう転んでもいじめは『悪』だ」

「…でも」

思わず声を出した。

皆話しかけて来なくなつて、一人になるハズだった私。それが自分を
いじめていた笹岡と仲良くしているように見えていたんだとしたら…
これまでのイジメも、笹岡によるエコヒイキなのだと勘違いしてしまっ
たとしたら。それまで笹岡にいじめられた腹いせを私にしてくるのは、
わかる気がする。

「…気に入らないからってイジメていいのか？バカにするなよ」

硬い声。ぴりぴりした空気…たまちゃん？

「黒姫、怒らないのか？」

え、どうして私が怒るの？

あれくらい、別にたいしたことじゃ…。

「そんなの、完全にただの八つ当たりじゃない。腹が立つなら直接笹岡に言えばいいのよ。卑怯者の集まりなんじゃないの！」

珍しくドーリイが声を荒げる。

だけどそんな、相手は仮にも教師だし、直接言うだなんて…。

「黒姫」

たまちゃんが静かに声を出した。ドーリイがぐつと口を噤む。

「『たいした事ない』とか言って、心を殺しちゃダメだ」

「心を…？」

「そう。そんなコト繰り返してたら、他人の痛みが解らなくなつてたまちゃんが、今までに見たことないくらい真剣な目をして言った。

「『そんなコトたいしたことじゃない』。私も乗り越えたんだから、あんたも乗り越えなさいよ」って、カンタンに言うようになったっやうよ」

ぞつとした。それがどういうことか具体的にはよく解らないけど、とてもよくない事だつていうコトだけはわかる。

「まあ…我慢するべき時もあるが、痛いことは痛いって解ってからした方がいいぞ？」

ミサミサさんに言われて、たまちゃんの真剣な目を見て、自然にコクンと頷いていた。そしたらミサミサさんが、ふつとチカラを抜いたみたいに笑った。

笑った…！

「…さて、じゃあ私達の苛立ちは直接笹岡にぶつけるとして、本題に戻ろう。たまき、昼休みは何をしていたんだ？」

昼休み…たまちゃんが来なかった唯一の休み時間。

「私に黒姫の様子を見に行くよう頼むくらいだ、何かあったんだろっ？」

え？

「ミサミサさん、ひょつとして探してくれましたか？」

「ああ。なんでだ？」

「なんでだ？」って…！

『人嫌い』で『滅多な事がないと教室からでてこない』と有名な『氷の女王』が、私のためにわざわざ…

「どうして？」

「…それくらい、自分で考えろ」

フィと顔を逸らされた。ミサミサさんを怒らせちゃったかもしれない。

「ふふっ 美咲ったら照れてるのね」

「うるさいッそれよりたまき、何があったんだ？」

ああそうだ、たまちゃん。

「…うん。実はな、今朝黒姫に声を掛けたら」

バシッ。

「たッ！」

ミサミサさんがたまちゃんを叩いた。

「きくさくまはあああ！私が昨日言った作戦の意味を理解してなかったのか？」

ギリギリギリ。変な音を立てて喉元を締め上げている。

「てっ『敵を知る』っシヨ？でもチヨクで係わった方が解ると思っカハッ、」

「バカか！私が言ったのは『敵の顔を知る』だ！」

「く、苦しつ…」

「だからあれほど『わかったか？』と確認したのに…！」

「ぎ、ギブギブ」

「たまちゃん！？ちょ、やめて…！」

私の叫びに、ビックリした顔してそのまま二人が固まった。その隙に逃げたたまちゃんがゲホゲホむせている…ああ、驚いた。

「…たまちゃん、大丈夫？」

「んゝへーキだよ、ありがと。ミサミサは鬼だな、鬼！」

停止してた二人はゆつくりとこちらを向いて。プーツと噴出した。
「アハハッ…ハハッた、『たまちゃん』ですって！何？今更アザラシなワケ？それとも多摩川？く、苦しッ…斐愛ちゃん最高だわっ…！」

「アハハ！た、たまきがよくゆ、許したな、てつきり心の中だけでかと…アハハハッ…！」

すごい。『氷の女王』と『ドリー』の爆笑シーンなんて、見たくても見れるものじゃない。

「はあ、はあ、はあ…あゝ笑った。で？そんな事言うくらいだ、モチロン笹岡と接触したんだろうな？」

ミサミサさんが涙を拭いながら聞いてくる。

「モチロン。今朝黒姫と話してるときにな、ターゲットにされたらしい」

「ターゲット？」

顔が青ざめたのが、自分でもわかった。

「そう。いやあ次の休み時間から、上から水は降ってくるわ知らない先生から注意は受けるわ、んゝ後なんだっけな？不幸な手紙とか…まあ致命的なのは一切なかったんだけど」

「…狙ってきたのか？」

ミサミサさんが低い声を出した。同じように青ざめている…ああ、どうしよう。私に関わった所為で迷惑を掛けてしまっているんだ…！

「あ、あの、ご、ごめんなさい…私の所為で…！」
折角友達になれたと思ったのに、これじゃあ…。

「ああ、気にしないでいいよ」

たまちゃんがキョトンとした表情で言った。パシッと手を叩いて、ニツと笑う。

「教師を潰せるなんて、こんな楽しそうなこと滅多にナイからね」
発言が完全に悪役ですが…！

「本当に…たまきに喧嘩売るなんて、命知らずにも程があるな」

「…完全に潰す気ね。見てよ、あの笑顔」

二人がぼそつと呟く。

「…迂闊にも敵に同情しそうだ」

「でもたまきが狙われたっていう事は、斐愛ちゃんがいつも一緒にいる子…ええと」

「トモ、ですか？」

「そうそう、その子は大丈夫なのかしら？」

ドーリイに言われてギクリとする。そうだ、トモはいつも私と一緒にいて、その所為でクラスメートからも浮いてしまっている。

笹岡は、ひよつとしたらトモにまで…。

「トールは黒姫の友達まで知ってんの？」

「たまき、こういうのはストーリーかっていうんだ」

「違うわよ！私達のグループに入らないかしらって、いつも会話してたから…！」

へ？

予想外の言葉に意識が浮上する。わ、私が『ドーリイズ』に？ムリムリ無理無理！

「斐愛ちゃん美人でしょう？昼休みにいつも歩いているからいつ声掛けようって話してたのよ。だけど」

ドーリイはにっこりと笑って言い切った。

「誘わなくてよかったって思うわ。最初からそのつもりなんですよ、たまき？」

「別に、今はそんなつもりないけど」

「あら、そうかしら」

意味深長な言葉の意味は解らなかったけど、解ることもあった。いじめられているようなコをグループに誘うバカはいない。

「話を戻しましょう。昼休みは何をしていたの？」

ドーリイが頬杖をつきながらたまちゃんに聞く。：まさか昼休みの間中、笹岡にいびられていたとは思いたくないのだけれど。

「昼休みは植チャンのトコ行ってたんだ」

「植チャン？」

「二組の担任よね、植垣先生」

冬枝さんが教えてくれて気付く。いつもたまちゃんを怒ってる男の先生だ。そうか、たまちゃんは先生とも仲がいいんだ。

「植チャン、とうとうリツコに失恋したんだって」

：ん？

「リツコって」

「保険医」

紅茶のカップを落としそうになった。

「その悲しみを延々聞きながらさあ、笹岡のこと聞くのは結構至難のワザだったワケよ？」

「ハイハイ大変だったな」

ミサミサさんの適当過ぎる返事にたまちゃんが不貞腐れる。

「もうちょつと^お労ってくれ」

「でも聞いて来たんでしょ？」

ドーリイが先を促すようにニツコリ笑った。

「モチロン。アイツさあ、やなヤツのクセに先生ウケがよくて」

「つけ入る隙がなかったのね？」

「そういう事」

面倒くさそうに頭の後ろで手を組んだたまちゃんが、でも、といって笑った。

「つけ入る隙がないってさあ、余計に怪しいと思わない？」

にんまりとネコのような顔をして笑う。

「出た、悪人の笑い方」

「どんな手を使って陥れる気かしら」

二人が困ったように顔を見合わせる。陥れるってそんな、まるで罠でも張るかのように……罠？

「黒姫、そのアメ……」

「コレ？たまちゃんと一緒に買ったのだけど……」

しばらくじつとアメを見ていたミサミサさんが、口を開いた。

「……それだけじゃ緩いんじゃないか？」

「そう？」

にんまり笑ったたまちゃんは無敵に見えて力強い。

「まあ教師の方はソレでいいとして、問題は部活のメンバーよねえ」

『ソレ』が何かは良く解らなかったけど、ドーリイがカップをソーサーに置きながら「どうしたい？」と聞いてきた。

……私は、どうしたいんだろう。

「待て冬枝。モンチの二の舞をする気か？」

「あら、あの時の？でもアレは仕方なくてよ、お願いしてきたのはモンチだもの」

「……島田さんと何かあったの？」

気になって、つい聞いてしまった。島田さんだつて『カリ』とか言つてたし、やっぱり気になる。というかその前に。

「しまださん？」

三人揃つて首を傾げるって、オーイ。

「……モンチさんです」

「ああ！」

『ポン』じゃないよ、『ポン』じゃ！

「あれは……そうねえ、モンチのお兄様が馬鹿にされていたらしくてね」

ドーリイが人差し指を顎に置いて思い出しながら教えてくれた。続いてミサミサさんが口を開く。

「で、笑われないようにしてくれってモンチが言うから……」

「三人でちよつとからかつたんだ。そしたら『呪われる』だ何だと噂が立つちゃって…」

たまちゃんが肩を落としながら言った。そうか、それで島田さん、カリがあるって…

「チョット半殺しにただけなのに、ひどいよねえ？」

「どつちが！？」

「アハハ、冗談だつて！黒姫つてやっぱりツツコミ上手いよね」

…冷静に考えたら、こんなにか弱い女の子三人で男子相手に半殺しとかありえないんだけど。たまちゃんの迫力が、時々なんでもできそうに見えるから怖い。

「で？^{ひめ}斐愛ちゃんのご希望は？」

トン！頼杖をつきながらドーリイに聞かれた。

希望は…私の希望は…

「とりあえず、笹岡を潰したい」

顔を見合わせて、四人でニツと笑い合った。

「決まりだね」

コツコツ

音がしてサツとカーテンを開けると、窓の外…一階の屋根の上に大きなカラスが二羽、止まっていた。

「あ、つきとめたみたい」

ドーリイが立ち上がると、カラスの一羽がぺコツと頭を下げた。

…え？

「黒姫、トールは動物を操るんだ」

ハイ？

「美咲に言われてね、笹岡の家まで尾行させてたの。ふふっあら、縄張り争いがあったの？ごめんなさいね」

ニッコリ笑うドーリイは、それはそれは綺麗だった。

「結局一番収穫があったのは私みたいね」

言いながら目の前にペンを置かれる。文房具屋さんに置いてあるような、大きくてカラフルなカワイイペンが一本。

「…美咲が作ったのよ。凄いでしょ？」

「トールも凄いよ」

トモだつて凄いもん！…なんて、ウツカリ友達自慢しなくなった。

「使う、使わないは斐愛ちゃんに任せるけど…覚えておいてね」

ドーリイは人差し指を唇にあてて、ふんわりと笑った。

「学校でお喋りができなくても…私達は、友達よ」

坂の上の有坂小学校。

いつもなら圧迫感を感じて異様に大きく感じるソレも、今日は全然平気だ。

登校班には母親から『バレー部の朝練で先に行ってる』と伝えてもらうことにして、いつもより三十分も早く学校に着く。

正門には既にたまちゃんがいた。

そのまま教室ではなく職員室に向かう。笹岡が毎日早く来ていることは、昨日教えてもらった通りだ。

「先生」

笹岡を目の前にして、足が震える。また昨日と同じように体が硬直する。ポン、背中を軽く叩かれた。

たまちゃんだ。

ニツと笑って先を促される。うん、大丈夫。

一人じゃない。

「おはようございます」

ニツコリ笑おうとしたのに、頬がガチガチで上手く笑えなかった。なのに。

「おお、黒澤かぁ。どうしたんだ？」

笹岡はニヤッと笑って私の頭に手を置こうとする。…気持ち悪い。笹岡のゴツゴツした汚い指が、私の髪に触れる寸前。

「双眼鏡」

たまちゃんが声を出した。

「…この双眼鏡、何に使ってるんですか？」

笹岡の顔が、文字通り色を無くした。

「な…何言ってるんだ、ソレは先生のじゃないぞ。はは、は…」
「そうなんですか？でも…」

先生相手でも、たまちゃんは一步も引かない。それどころか。

「でも、指紋調べたら誰のかわかりますよね？この双眼鏡…」

にんまり笑ってけしける。瞬間、笹岡の顔色が変わった。目が怖い。お、怒った、どうしよう…！

「…フン」

笹岡が、聞いたことがない低い声で小さく言った。

「お前みたいなガキが何を言ったところで、警察が動くか」

ぞっとした。どんなに最低でも大人の、男の先生なんだ。怒らせたら何をされるか…！

「解ってる」

たまちゃんがきつぱりと言い切った。大人相手に一步も引かない、凛と正した姿勢。それどころか。

「だから、宣戦布告しに来たんだよ…センセ」

ニツと笑う姿はとても格好いい。

「…黒姫」

たまちゃんに小さく名を呼ばれて。すうっと息を吸い込んだ。

「私、バレー部には出ません」

パラパラと登校してきた数人の生徒を見つけて、たまちゃんが昨

日買ったアメをカバンから取り出して食べ始めた。え、私も食べるの？

ああ、目立つ方がいいって、まさか…。

「藤森い！まあたお前かー！」

案の定先生が怒りに来る。たまちゃんの笑顔を見て確信した。やつぱり、コレを狙ってたんだ…！

「おっはよー植ちゃん！早いね」

「おうっ藤森も早いな…じゃなくて！」

ドカドカと歩いてきた植垣先生が、ひよいひよいとアメを取り上げてしまった。

「学校にお菓子を持って来るなど言つとるだろうが！」

「だって笹岡センセがくれたんだもん」

「こら！先生にはちゃんと敬語を使えと…え？」

先生の動きが止まった。ああ、何の罪もない先生が騙されるのね。

「さ、笹岡先生が、本当に？」

「酷いな植ちゃん、生徒疑うの？」

「えええいやっそれは…だが…ほ、本当か？」

「本当だもん。黒澤、お前はかわいいからアメをやるうな…って笹岡先生が」

え、え？

「黒姫の隣にいたから、ついでに貰えたんだけど」
ねー！

ニツコリ笑うたまちゃんに合わせて、首を傾げる。

「そんな…笹岡先生が…」

「嘘じゃないもん。先生も知ってるでしょ？疑うなら、笹岡センセのカバン、調べてみてよ」

え？

「このアメ、まだたくさん持ってたから」

サラッと嘘を吐くこのヒトは、悪魔なんじゃないだろうか。

「…たまちゃん、先生本当に行っちゃったけど？」

「うん。それが狙いだしね」

「…笹岡のカバン、アメ入ってなかったよね？」

だってアレは昨日二人で買って、それぞれのカバンに入れておいたものだ。

「入ってるよ」

え？

「笹岡のカバンの中。ねえ黒姫、この双眼鏡、どこから出したんだと思う？」

急に話題が変わって間が空く。え、双眼鏡？

「実はね、昨日職員室に行った時見つけたんだ」。ふふふ

昨日言ってた『糸口』って、コレ？

「さっき黒姫が話してる間にね、笹岡のカバンから出したの。ビックリしたと思うよ、隠してたハズの双眼鏡が目の前にあったら、そりゃ誰だって驚くよね」

ああ、それで笹岡のヤツ顔色を無くして…。

「その時にね、仕込んだんだよ」

ニンマリ、たまちゃんが笑う。

「大量のアメ」

ああああ…ミサミサさんが、『迂闊にも同情しそう』だといった意味が今解った気がする。

大ッ嫌いな笹岡に、うっかり同情しそうになったから。

「黒姫」

深い青色のパーカーが風に揺れる。

「…反撃の挨拶は、こんなものでいいか？」

たまちゃんの笑顔はどこまでもオトコマエだった。

『五年二組藤森たまき、五年三組黒澤斐愛、至急職員室まで来なさい』

朝の時間を終えた僅かな時間に、校内放送で呼び出しを受けた。

…こんな事ハジメテだ。

「…たまちゃん」

「不安な顔するんじゃないよ、黒姫」

どうしようどうしよう。このままじゃ、たまちゃんにもっと迷惑を掛けてしまう…！

「胸を張って！」

たまちゃんのイキナリの大声にビックリする。

「黒姫は何も悪いことしてないっシヨ。俯かないの！」

ドンと胸を張ったたまちゃんが、私をかばう様に前を歩いてくれる。

…うん。うん！

ぐいと胸を張って、前を見る。

そうだ、俯く必要なんかない。恥ずかしがる必要もない。だって私は、悪いことなんか、していない。

「植ちゃん、校内放送使って呼び出すなんてヒドくない？」

「ああでもなあ藤森、笹岡先生のことなんだが」

「君かあ、藤森というのは」

ねっとりとした不安が全身を包んだ。

笹岡…！

「君かあ、って今朝会ったっつーの。もう記憶が飛んでるんですね、ちゃんと起きてます？」

「…噂に違わずズイブんな物言いだね」

たまちゃんが完全にバカにした態度で笹岡に笑いかける。

眉をしかめた笹岡が『しょうがないな』というように笑った。

… 何かがオカシイ。今朝はあんなにうるたえていたのに。何かあったんだろうか？

「植垣先生から、君が僕からアメを貰ったと言っていると聞いたんだけどね、本当にそう言ったのかな？」

子供に対する口調。完全にバカにされている。

「はあい、そうです」

たまちゃんも負けてない。

… ちよつと笑いそうになっただけ。

「藤森、それなんだが」

植垣先生は白髪の入った初老の先生で、人のよさそうな八の字眉毛を更に下げて丸眼鏡を掛けている。… なのに失恋で。

「ふふっ」

「… 友達が怒られているのに、どうして笑えるんだ」

植垣先生の固い声に、体がビクツと反応した。

… しまった。思わず笑ってしまった。

「黒澤は先生を信じているんだよなあ？だから笑ったんだろう？」
違う違う、そうじゃなくて…！

たまちゃんと目が合った。なのに逸らされて。ああ…！

「藤森、笹岡先生のカバンからは何も出てこなかったんだよ」
嘘だ。

今朝たまちゃんは細工をした。これだけは、間違いない。

「… どうして嘘を吐いたのかな？」

笹岡の言葉に。

「う、嘘を吐いてるのは笹岡先生の方です…」

やっと出せた声は小さく、先生たちの耳に届かなかったみたいで「ん？」と聞き返される。

緊張で全身が震えるで、手足が凍ったみたいに冷たい。なのに顔だけは火が付いたみたいに暑くて、真っ赤になっているのが自分で

もわかる。だけど。

たまちゃんを嘔吐き呼ばわりするのは許せなかった。

「アメは、確かに先生から貰いましたっ…！」

精一杯の大声は、みつともないくらい震えていた。

「あはははは！ダメだ我慢できない…！」

突然、たまちゃんが大声で笑い出した。

「アメ隠しただけで優位に立ったつもりになるなんて、本当バカだ

！あはは、ダメだ、お、お腹痛…あはは！」

アメを、隠した…？

「藤森、何を言ってるんだ？」

うるたえる植垣先生の隣で、笹岡の顔色が変わる。

「でもダメだよ、職員室に呼び出した時点でアンタの負けだ」

たまちゃんの雰囲気が変わった。

「…そうだよね、黒姫」

ニツと笑ったたまちゃんの言わんとした事を瞬時に理解して、ポケットの中に入れておいたペンを取り出した。昨日ドーリィから貰ったソレ。

カチリ、シャーペンを出す時みたいにヘッドを押す。

『黒澤はとてもかわいい』

笹岡の、大きなやらしい声が、職員室中に流れた。

『細い手足、長い髪…！理想だなあと思ってたんだ。最初はなあ、僕の片思いかと思っていたら、黒澤も僕のコトが好きみたいでさ、あの大きな黒い目で、僕を誘うんだよ』

だが、いつ、そんなこと…！

『黒澤は何も言わないけどさあ、僕にはわかるんだ。ほら、アイツはシャイだろう？だから人前じゃ恥ずかしがるだろうと思って、わざとヒトリになるように仕向けたんだ。そしたらもう喜んで喜んでずーっとべったりなんだぞ』

ぞつとする。

『イジメ？ああ、やってるみたいだね。だってさあ…くくくつ…そう仕向けたの、僕なんかもん』

植垣先生の顔から、おもしろいくらい色がなくなった。

だけどコレを表沙汰にしたいくないのは私も一緒。喜んで話し合いに応じるわ。

…もちろん、そのテーブルには笹岡がない事が前提だけど。

『変な事聞くねえ！僕がイジメを止めるワケないじゃん。折角黒澤が僕を頼ってくれるのにさあ』

腐ってる。

根本的なところから、全部。

『シャイだから苦勞も多いけどね、幸せだよ。昨日なんか余りに恥ずかしがって、クラブ休んだんだ。だから今日僕がわざわざ迎えに行っただっていうのにさあ…！』

たまちゃんが言った意味が、今になって解る。

「『たいした事ない』とか言って、心を殺しちゃダメだ」

…そうだね、その通りだね。

だって今、吐き気がするほど腹が立つ。怒っていたんだ、自分でも気付かないまま本当はずっと…笹岡が髪を注意した、あの日から『藤森たまきって邪魔だよね。今朝僕の斐愛ちゃんに話掛けていたんだよ…やっぱりさあ、明日はもつといじめないとダメだよねえ』
…絶対に、許さない！

「ハイ、コレも証拠品」

たまちゃんが植垣先生に双眼鏡を渡す。…これで見張っていたのだと、今なら解る。

「笹岡センセもバカだね」

たまちゃんが、クスクスと笑いながら笹岡の机まで歩いていく。
「おとなしくアメを見つけてもらっておけば、こんな事にならなかつたのに」

一番下の大きな引き出しをひっぱって、その奥からアメを数本取り出すと。

「…アンタ」

そのアメで笹岡を示しながら言い切った。
「喧嘩売る相手を間違えたんだよ」

たまちゃんの圧勝、だった。

「ヤッター！授業がなくなった！」

「先生たち、緊急会議だつてよ」

わーわー騒ぐ生徒をかくぐつて、トモの元に急ぐ。

「たまちゃん、本当にありがとう！」

「別に、楽しかったしいよ」

感謝してもし足りない。どうしたら喜びが伝わるだろう。

「斐愛（ひめ）！」

「トモ！黒姫つて呼ぶんじゃなかったの？」

「ぎゃ、忘れてた！それより先生たち緊急会議つて…りっちゃんにバレたんじゃない？」

りっちゃん。

そうだ、ウツカリ忘れてた。

保健室のリツコ先生は私の父の妹…つまり叔母にあたる、黒澤李（り）津乎（つこ）だ。

この叔母は姉と大変仲がよく、たまちゃんによると植垣先生が失恋したと言つ相手…。

「ふふっ」

「何笑つてんの？それどころじゃないつてのに！」

怒られた。

…きつとトモも、知らないトコロで笹岡から嫌がらせを受けていたんだろうと思う。だつて、たった一言会話しただけのたまちゃんですえ攻撃対象だったんだから。

なのにそんな様子を全く見せないで、私の心配ばかりしている心優しい友人に。

「…ありがとう」

百回言っても足りないけど。そう心の中で呟いて。

「バレたら素直に謝るよ。でも緊急会議つて、保険医は関係ないんじゃないかなあ？」

とりあえず全部解決したんだから。
…そう安心していたのだけれど。

本当に大変なのは、ここからだっ
た。

家に帰ると母親が驚いた顔をして迎えてくれた。昼過ぎになって「緊急のPTA会議を開くそうよ」と言いながら慌しく出て行くと、家の中は自分ひとりになってしまった。

…ひよつとしなくても、議題はバレー部の事だろう。と、いう事は…

どうしよう、お母さんにバレちゃう…！

そわそわしながら家の中で待つ。気付くともう五時を過ぎていて、手足が震えた。

…事態は想像以上にオオゴトになっているみたいだ。どうしよう、どうしようと言いながら家の中をぐるぐる歩いていたら、ピロポロと玄関チャイムが鳴って、慌てて出る。

たまちゃんが、いた。

「え？」

「トールが帰って来ないんだ。もう六時だっていうのにおかしいなあって…だから、ひよつとしたら黒姫んトコに笹岡から何か連絡あったかもって、思ったんだけど」

一気に話すとゼエゼエ肩で息をしている。

あのたまちゃんが焦るだなんて。

「…笹岡からの連絡はないけど」

「わかった、ありがとう！」

そのまま走って行こうとするから、思わず腕を掴んだ。

「私も行く！」

「普段ならテレパシーが使える範囲にいるんだ」

今更テレパシーだとか言われても驚かない。

ミサミサさんにもドーリイにも不思議な能力があった。今更たまちゃんにだけ不思議な能力がないって言われても、その方が信じられない。

たまちゃんが自転車をこぎながら教えてくれる話を、黙って聞いていた。

二人乗りは危ないけど、今はそれどころじゃない。

「なのに、どんなに呼びかけても返事が来なくて」

ひよつとしたら。

悪い予感が脳裏を掠める。

どうしよう、私の所為だ…！

解決したと喜んでいた。けどそれは、ドーリイのお陰で。

…あのレコーダーを流した時、笹岡はすぐに気が付いたんだろう。

昨日、あの綺麗な女子生徒と会話した内容だと。

「気にするな、黒姫の所為じゃない」

きつぱりとした口調で言われる。

「…ヤツがここまで最低だと思わなかった。くそっ！」

自転車が加速する。

「あのまま」

たまちゃんが静かな声で告げた。

「見逃してやるつもりだったのに」

向かった先は、学校だった。

靴箱を通り過ぎてそのまま校舎を横切り、飼育小屋へ向かう。

…ここに何が？

「たまき！」

ミサミサさんがいた。

「クロがここにいるのか？」

「クロじゃない、今はガーコ！」

たまちゃんが『ガーコ』といった瞬間、飼育箱の中から一羽のアヒルがガーガー鳴きながら出てきた。

え、どうやって？

「このアヒルはただのアヒルじゃないの」

ふふふとたまちゃんが笑う。…説明している暇ないんじゃない？

「大丈夫だ。冬枝は動物が扱えると言っただろう？」

ミサミサさんが腕組しながら教えてくれる。

…そういえばそうだった。

「本当に危なくなったら動物を集めるから、すぐに解っちゃうんだ」

「今ここの鳥たちに動きがないっていう事は、それだけまだ安全な状況にいるっていうことだから」

そうか、それなら…。

「…たまちゃんはどうしてあんなに慌ててたの？」

聞いた瞬間、二人ともバツが悪そうに視線を逸らしながら。

「…たまきが決めたんだ」

「ええっミサミサ…！いや、確かにそうだけど」

二人で押し問答している。どうしたのだろう、らしくない。

「本格的に、さ」

頬をポリポリ掻きながら、たまちゃんが口を開いた。

「黒姫を巻き込もうかな」なんて」

あはは。

笑われたけど…何、どういう事？

「ミサミサ、ガーコの姿見える？」

「いや、全く。黒姫には見えているみたいだが」

ミサミサさんに言われて首を傾げる。ガーコ、って…このアヒル？

「アヒルの姿をしているのか？」

心の中を読んだらしいミサミサさんが、たまちゃんに尋ねる。けど、『しているのか』って…どういう意味？

「今はそうだよ。スゴイね黒姫。本当に『見えて』るんだ」
会話がサッパリ解らない。

「黒姫、ガーコはたまきの使い魔でな」

つかいま？

「本来ヒトには見えない生き物なんだよ」

たまちゃんが笑う。ガーコと呼ばれたアヒルが光って変化した。

その姿は、黒猫。

「…本当に『見えて』いるんだな…」

ミサミサさんにしみじみと呟かれた。見えているものを当てられるかと聞かれて、ちよつとバカにされているような気さえたけど、これは本当に…見えて、ないの？

「ミサミサにクロの姿は見えてないよ。ていうか、人間でクロが見えるのは黒姫で二人目」

二人目？

「ヒトリはね、植ちゃん」

初老の先生がポンと浮かぶ。

「だけどさあ、さすがに先生を巻き込めないっしょ？だからどーしよーって思ってたんだけど、まさか黒姫が『見える』なんてさあ！」
「私も知った時は驚いた」

たまちゃんがニツコニツコ笑いかけてくる隣で、ミサミサさんが頷いているけど…『知った時』って？

「昨日」

ミサミサさんが教えてくれた。

「冬枝がカラスから道を聞いていた時に『二羽いる』と思っただろう？」

二羽…言われてみて思い出す。確かにいた。

「だけど私と冬枝には一羽にか見えていなかったんだ」

…え？

「トールが心配だね。クロに警護を頼んでたんだよ。その時カラスになってたみたいで」

みゃあ、足元で『クロ』が鳴いた。

「…みゃあ、じゃないよ。何やりきった顔してんの？頼んだのは『トールの警護』！何でトールが命令した『動物の警護』してんのさ」
たまちゃんがクロちゃんに怒るけど、クロちゃんはつんと顔を逸らしてしまった。

温い風が頬を撫でる。

「黒姫の目は真実を映し出す…」

たまちゃんの雰囲気が変わる。

ざわり、大きな音が聞こえた。

「PTA会議が終わったんだ」

ミサミサさんがシマツタという顔をして言う。

「どうしよう、ここじゃ目立ちすぎるもんね。トイレにでも行く？」

「…汚い。黒姫、どこか密談できる場所はないか？」

たまちゃんの提案を一蹴したミサミサさん。迂闊な返事はできないぞと考えて…

「保健室、とか…どう？」

りっちゃんはきつともう帰っているだろうから。

一番左の窓を音を立てないように開ける。この窓の鍵が閉まらない事は、りっちゃんと私、二人だけの秘密だけど、ピンチだから許してもらおう。

「スゴイなあ、秘密基地だ！…ますます入って欲しいね」

「じゃあ、ここからが本題だ」

ミサミサさんがヒトツ、咳払いをした。

「たまきには秘密がある。それは余りに大きいから…一緒に秘密を守る『仲間』を探してるんだ。いざという時に動ける、信頼できる仲間を」

「最近は何でも請負人」になってるけどね。モンチといい黒姫といい…その前にも誰か来てたっけね」

…本来この三人は、その理由で集まっていたのだろう。なのに、たまちゃんが誰かヒトリを助けたことで『今の状態』が始まったんだ…と、思う。

どういう状況かは解らないけど、それを知ったモンチさんがたまちゃんを頼り、モンチさんの噂を聞いた私がたまちゃんに助けってもらって…。

「…私で役に立つのなら」

喜んで手伝おう。それで、感謝の気持ちが少しでも伝わるのなら。

「やったー！仲間が増えた！」

たまちゃんが心底嬉しそうに笑った。

…よかった、いつものたまちゃんだ。

「じゃあ話しても大丈夫だな」

ミサミサさんが息を吐き出す。

「まずその一。最初疑問に思わなかったか？私達になぜ不思議な力

があるのか」

…あ…。

「そ、それどころじゃなかったから」

「そうだよな」

「たまきは黙ってる。…私達三人が幼馴染だとは話したよな？」

「うん」

「幼稚園の頃、遊んでいる時にたまきに能力を貰ったんだ」
チカラ
という事は。

「たまきは動物も操れるし人の心も読める」

「真実を映す目もあるよ」

たまちゃんが笑いながら言った。…待つて、それって…。

「黒姫と一度ぶつかったことがあったみたいでさ、その時に渡しちやつてみたい」

てへ。たまちゃんが笑う。

…ソレで誤魔化そうとしてない？

「バレてるぞ、たまき」

「みたいだねえ」

『だねえ』じゃないよ！

「気持ち解らんでもないがな、黒姫。冬枝を助けるのに時間がないんだ、本題に戻るぞ」

そうだ、ドーリイ！

「今回の冬枝のように、誰かが身動き取れなくなる場合があるだろう」

ミサミサさんが続ける。

「普段学校で会話しないのは、こういう時のためだ。『繋がり』が見当たらなければ私達の存在に気付く者はいない」

確かに。

最初この三人が知り合いだと知った時には本当に驚いた。

「それともうヒトツ。たまきは絶対にバレないが、私達はそうはいかない」

「バレル？」

「ああ、たまきはな、富士山の…」

ザア…。

保健室から見える右側の木が、大きく揺れた。

「…トールは笹岡の家にいるよ」

皆思いつくところは一緒みたいだ。だけど今まで会議だったはずなのに、どうして？

「本人がいたら感情論になるからな。自宅謹慎中だ」

誰かの心を『覗いて』知ったのだろうミサミサさんが教えてくれる。

そうか、それで…。

「私達三人は距離をとって進む。どこに同級生がいるか解らないからな」

そ、そこまで気を使う…！

「…遊びじゃないんだ黒姫。私は別ルートで向かって結界を張る。たまき母のだから強力だろう」

「げっマジで？」

おお、たまちゃんが嫌がっている！

「ガーコが先頭で、たまき、黒姫、私の順に行こう。万が一たまきがガーコを見失っても、黒姫がいるからな。大丈夫だろう」

「ガーコじゃなくて今は『クロ』だよ」

たまちゃんがクロちゃんの今の状況を説明するけどミサミサさんは取り合ってくれない。

それより。

「使い魔なら、たまちゃんを待つんじゃないの？言葉も理解してるみたいだし…」

「黒姫はコイツの気まぐれを知らないから…」

うんざりした顔のたまちゃんに、

「ああ、ペットは飼い主に似るっていうもんね」

ウンウン頷きながら答えたら、ミサミサさんが後ろで爆笑していた。…そんなに可笑しい事言ったかな？

ミサミサさんに言われた通り、先頭を走るクロちゃんの後を追って、たまちゃん、私、ミサミサさんの順に動く。

自転車は学校に置いてきた。二人によると「邪魔になるから」らしいけど、何がどう邪魔になるのかサッパリ解らない。

改札をくぐったたまちゃんに気付いて、大慌てで切符を買った…そうか、こういう事か。電車に乗る猫って、そういえば金曜ロードショーで見たことがあるなあなんて考えていたら、五つも駅を過ぎたところでクロちゃんが降りて、大慌てでついていく。

駅前の商店街を抜けて住宅街を横切り、細い路地に入ったところで…。

笹岡の家は見つかった。
にゃあ。

足元でクロちゃんが鳴く。

あれ？

たまちゃんが見当たらない。

安っぽいボロアパートには明かりがたくさんついていただけ、解る。

二階の一番端の部屋。

笹岡はきつと、あそこにいる。

少し待ってみたけれどたまちゃんは見当たらず、ひよつとしたら先に笹岡の家にあがったかもしれないと思い至って階段に足を掛ける。

軋む階段をそつと上つてドアに耳を当てた。

「先生はなあ、とおつても怒っているんだよ…解るか？」

「あら、まだ教師でいるおつもり？ 図々しいにも程がありますわ」

笹岡とドーリイの声だ、間違いない。

「…大人をバカにするのも程々にしておけよ」

「あら、何か勘違いなさってませんか？ 私、あなたが大人だからバカにしてるわけではありませんのよ」

「ほお？」

二人分の声しか聞こえてこない。たまちゃんはまだ来てないみたいだ…どうしよう。

ポンポンと交わされる会話からは、恐怖を感じている様子はない、けど。

私は知っている。

「あなたが『最低な大人』だからバカにしているの、解りまして？」
笹岡のあのいやらしい笑顔。見るだけでぞつとするような呼吸の仕方、その視線。

ぎゅっと、手のひらを握り締める。

キンコン。

高い呼び鈴が鳴る。

心臓がバクバク言ってるけど、もう後には引けない。ドーリイは、私の所為で捕まったのだから。

「…出て来い！」

震える足。力の入らない手。ただどこで逃げるような卑怯者にはなりたくない。

「出て来い笹岡！アンの目的は私でしょう？冬枝さんを離して！」
ギギイ。

軋む音を立てて開く錆びたドアが、恐怖を煽り立てる。

「黒澤かあ…！」

にやりと笑うどす黒い笑顔を見た瞬間、死刑を宣告された囚人のような気持ちになった。

「先生はなあ」

無理やり引き込まれた部屋の中で、笹岡の話に耳を傾ける。

この男はまだ先生のつもりでいるらしい。ホント、ドーリイじゃないけど図々しい。

「黒澤なら信じてくれると思っていたよ」

何と言う。

「黒澤は…斐愛は、僕の事が好きだろう?」
すうっと心が冷えた。

消えてしまえばいい。こんなヤツは…こんなヤツの所為で私をイジメていたバレー部も、みんな。

「図々しいにも程がありますわ」

ドーリイの声に我に返った。自分は今、何を願ったの。

「先ほども申しませんでした?…あら、カリカリ梅程度の脳みそでは理解できないのね、ごめんなさい」

フン。

鼻で笑う。

「…冬枝おまえ」

笹岡の顔色が一瞬にして変わる。

怒った。

声が、重く暗く響いて…怖い。大人の男の人が怒るのはお父さんくらいしか見たことがなくて、意識とは別のところで体が震える。

「誰が私の名を呼んでいいと許可しましたの?」

空気が凍る。

「言っただけでしょう。図々しいにも程がある。言って解らない子は…」
笹岡が完全に怒った顔をして大きく手を振り上げた。

殴られる！

「おしおき、ですわ」

バシン…！

「…よかった、間に合ったみたい」

丸く切り取られたように壊れた壁、その後ろ…空に浮かぶ、大きな満月。

ふわり、長いミツアミが揺れる。

「たまきは」

ミサミサさんの言葉を思い出す。

「富士山の森から来た、魔女なんだ」

浮かんだ箒の上に、女の子が仁王立ちしていた。

おいおいおいおい！思わず突っ込む。

そのポージングはどうだろう？しかもその箒…クロちゃんだよねえ？

薄めの太い眉、くりくりの目、色素の薄い髪、その全てがたまちやんだっただけ。

青いパーカーのフードの部分がセーラー服の上着のようになっていて、胸元にはパリッとしたリボンがひらひらしてる。青く短い上

着の下には、プリーツスカートのワンピース。トンガリ靴を履いている。

確かにこれじゃ、『藤森たまき』とはバレないかも。

あの不思議な雰囲気をもとって、にんまりと笑いながら、
たまちゃんが言った。

「——さあ、報いを受ける時間だよ」

24 (前書き)

エピソード

「だってさあ、変だ思うわけよ」

事件以来、トモの食いつき方は半端ない。

「笹岡の家は落雷で粉碎したって言うし、かと思ったら精神異常だって言うじゃない？」

たまちゃんが吹き飛ばした笹岡の家は、ミサミサさんの『結界』によって『落雷が落ちた』という事になっているらしい…未だに理解できないんだけど。

精神異常、というのは笹岡が私とドーリイを家で見たと言ったから…トモが「ドーリイとは一度もしゃべった事もないのにね」と笑っているのを見て、ああ学校で関わらないっていうのは大事なんだと気が付いた。

島田さんの言うていた、「最後には感謝する」という言葉の意味も。

「変ていえばさあ、あの日から藤森たまきがアンタのトコに来ないんだけど？」

本当に『仲間』になったあの日から、たまちゃんは学校で話しかけて来なくなった。

それは多分、私の為であり、皆のため。

「ぶつかったの気にしてただけなんじゃない？もう大丈夫だってわかったから来なくなったんでしょ」

だから、これから私がしなくちゃいけないのは、巻き込まないための努力…その為には嘘を吐く。大事だからこそ、尚更。

「でも、じゃあ何でバレー部が急に謝りに来たんよ？」

だけどトモは本当にしつこくて、どうしようかと考えて…りっちゃんを思い出した。

「…実はね」

「ほらあ、やっぱり何かあるんじゃない!」
食いつくトモに僅かに笑って。

「保健室の前にある大きな木、知ってる?」

「へ?…そんなのあったっけ?」

トモがきょとんとした表情をする。そんな事を言われるとは思ってもよらなかったという表情だ。

「あるの。保健室の右側の窓から見えるんだけどね、その木に願い事を書いた紙を結び付けたんだよ。そしたら」

雷が落ちたの。

言つとトモがビックリした顔をして「そうなの?」と聞いてきた。
…本当に人が良すぎてビックリだ。

だからこそ、絶対に巻き込んだんじゃいけない。決意をこめて、にっこり笑って言い切った。

「うん」

この言葉が、後の事件を巻き起こすキツカケになるのだけど、それはまた別のお話。

終わり

24（後書き）

ここまでお付き合い頂き、ありがとうございました…！
完結です。

初めての投稿で、毎回緊張しながらだったのですが、感想など頂けると嬉しいです。

今後の参考にしたいと思います。

機会があれば、またお付き合い頂けると嬉しいです。
ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4154m/>

放課後の秘密

2010年10月8日14時14分発行